

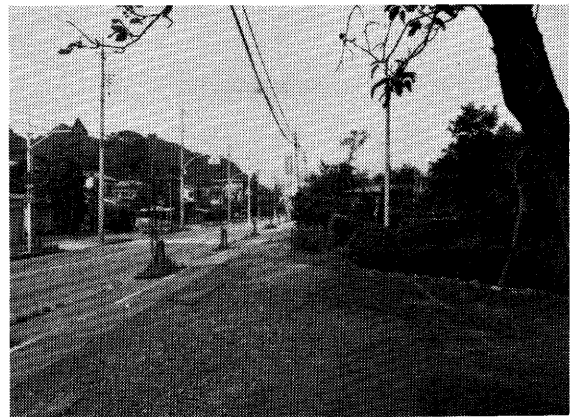
昭和58年10月20日

# 伊奈あはれ

郷土館だより  
第4号

五日市町立  
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607

## 伊奈市物語



### 伊奈新宿の今昔

(左・昭和30年代 右・現在)

はじめに 秋川谷に存在した2つの定期市、五日市と伊奈市のうち、五日市側の研究はすすんでいるが、伊奈市はその輪郭が明らかでない。昭和57年 五日市町伊奈新宿の石川尚志家の文書整理が行われ、新資料も発見されたので、今回は伊奈市について一歩進めた考察を試みた。

### (1)伊奈の古集落と新集落

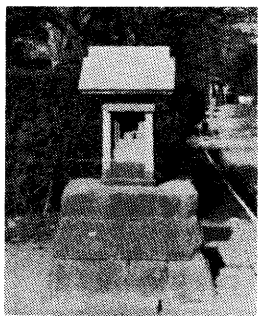
伊奈地域は大悲願寺(1191創立)から松岩寺(1357創立)にかけての山麓が沢水や湧水が多く、初期水田の多いところで、早くより開けていた。大悲願寺の開基は寺伝によれば平山季重といわれる。源平合戦の功労者季重の名が出るところからみると、平山氏が当地の地頭が開発領主として赴任したものであろうか。いずれにせよ鎌倉期には当地区は開拓され、集落も形成されていたと思われる。山麓に展開する東平、大上、北伊奈、松岩寺前などが古集落であろう。この地区は中世武士系住民の建てた板碑が多いこともその証拠となる。集落は山麓から

田畑の開墾につれて南に広がったと思われる。現在の伊奈の中心街をなす都道沿いの上宿や新宿は後に開かれた集落とみて間違いない。とくに新宿は文字通り新集落である。

伊奈新宿に関し、福生市教育委員会勤務の宮田満氏(五日市町在住)が注目し、新説を述べている。宮田氏によれば、上宿(本宿ともいう)の東部=新增戸会館付近=に原口(はらぐち)という古地名があるが、これは上宿の東が原野=おそらく入会の採草地=であったことを示している。原口とはその原野への入口であろう。現

在の新宿はこの原野を開いて設営したもので、その時期は戦国末期、伊奈に定期市が開かれたときではあるまいかという。新宿という地名は各地に見られるが、市の開設などに関連して発生している例が多い。宮田説もそれに従っている。また宮田氏は、この新宿の開発のリーダーを宿の中央に位置する石川家ではないかと推定している。石川家文書によれば同家の初代は天正期にさかのぼる。戦国末の天正期は定期市の発生した時期でもある。石川家は江戸時代を通じ、伊奈村の筆頭名家として絶大な勢力をもっていた。新宿の草分け主として初期伊奈市の統括責任も担っていたように思える。

上宿・新宿とも秋川の河岸段丘上、川に沿って通ずる往還を挟んで短冊形に屋敷地をもち、家作りをしている。これらの住民はもともとは北の古集落からの転出者（次三男の分家を含む）が多かったろう。彼らはあらかじめ市庭を設け、市日にあつまる出店から場所代をとり、普段は屋敷の裏側やその他の畑を耕作する農民として暮らした。山際の家が中央の台地に進出するという経過は五日市市場の場合も全く同様である。その時の一番の問題は飲み水であり、井戸の掘さくが重要課題となる。石川家は段丘崖を背にしており、良質の内井戸をもっていた。



伊奈の市神様

## (2)市のあけぼの

月何回と日をきめてひらかれる市を日切市（ひぎりいち）といった。鎌倉中期以降全国的に普及し、月3回（三斎市）が原則であったが、戦国期になると月6回（六斎市）が多くなったようである。

関東各地の定期市は主に領主の後だてをもって発生したといわれる。領主側では領民に経済力をつけさせ、そのうえで年貢金を徴収するねらいがあった。領民側は農産物、手工業品などを定期的に販売購入する機会が与えられるので、市の開設に熱心であった。市は各地に簇生した。秋川平井川筋の伊奈、平井、五日市は地理的には谷の口を抑える溪口集落と呼ばれる。谷の住民の物資交換場として適切な位置にあり、市の発生する必然性をもっていたが、開市を主導したのは当時の領主小田原北条氏であったろうと推定されている。

市日は伊奈市が1の日、平井市が6の日の各三斎市で五日市が5、10の六斎市になっている。実は伊奈市は当初1、6の六斎市であったが、江戸初期、代官頭大久保

長安の指示で6の日を平井に譲ったという。（石川家文書中にもこの件を裏付ける記録がある。）ところで五日市の市日が伊奈市の1日前に設けられたのは五日市が伊奈市の市日を意識してやったことで伊奈市より後に設定された証拠となる。狭い谷の中、隣接の地で前日に市を開かれた伊奈側は大変な打撃をうけることになった。石川家に延宝7年（1679）の文書で西武蔵一帯の市の市日表がある。参考に掲げよう。

下表では伊奈市が1・7の六斎市になっている。実はこの文書は五日市と伊奈市との市争いに関する文書で、伊奈側は6の日は譲ったが、その代り7の日に市を立てたと主張しているのである。 裁決では認められていない。

地名	市日	地名	市日
六王子	4・8	中山	1・5
拝島	3・9	青梅	2・7
所沢	3・8	五日市	5・10
扇屋	3・8	伊奈	1・7
飯能	6・10	平井	6

## (3)炭荷の争奪に敗れて

江戸時代に入り、江戸という大消費地の出現によって、山の物産木炭が俄にクローズアップされた。秋川谷の市は近隣相互の物資交流の場にとどまらず、江戸の炭需要を背景とする広域商圏の市となった。伊奈市は五日市より先発の市とはいえ、地の利を占める五日市を相手に目玉商品である炭荷の争奪に市の盛衰をかけて争わざるを得なくなった。

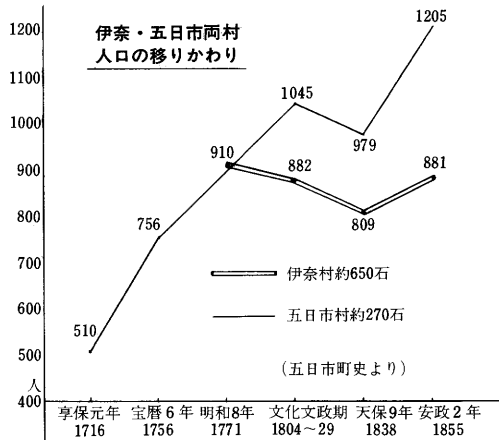
江戸時代を通じて幾回となく繰返される市争いについては五日市町史に詳しい。ここでは結果だけを一括して述べよう。

1 檜原村を中心とする山方の炭は生産地に近い五日市に抑えられ、伊奈市へは全く廻らなくなった。

2 五日市は享保20年（1735）に幕府が設定した炭運上（炭の税）の取立にからんで実質的な専売権を得た。以後檜原、養沢、伊奈の五日市に対する抗争は権力の後盾をもつ五日市に抑えられた。

3 五日市村の市庭提供者は取引に介在して百姓から商人に変わった。江戸時代後期には五日市の町には炭問屋を主軸とする店舗が並んだ。

高度成長の文化文政期を経ると五日市の町並は居酒屋、煮売屋、すし屋、餅菓子屋など庶民生活の向上を反映する多彩な店が加わり店舗の数も百軒に達した。5、10の市日は出店で賑わい、近隣からの買物客で混雑した。一方これにひきかえ伊奈宿では道路沿いの家々も、ひっそ



りと淋しげで1日11日21日の市日も出店が少く人かげもまばらであったと思われる。市庭提供者にとってむしろ賃(場所代)もたいして生活の足し前にならなかったであろう。伊奈宿に職人衆が多かったのもこうした状況と

関連があると思われる。経済的な盛衰の差は両村の人口にはっきりと反映し、左記グラフにみる通り伊奈村の停滞ぶりはあらわであった。

#### (4)伊奈市の出店

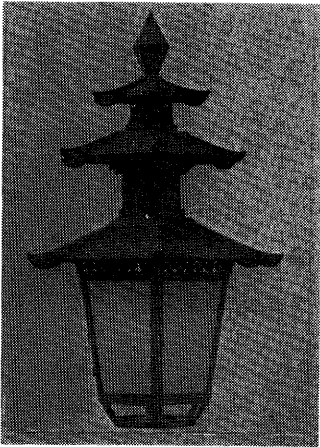
最後に伊奈市の市庭を借りる業者の一覧を掲げる。これも石川家の資料であるが、残念ながら11月朔日とだけ記されていて年が不明である。おそらく江戸も後期のものであろう。内容は誠に具体的で伊奈市の実態が如実にわかる。市庭を貸している者は14名、出入業者は計53名、彼等はその時どきで入れかわり立かわり店を張ったものであろう。足袋、なべ、釜など日用品の店が多いが、“石売り”というのは特徴がある。伊奈石の石臼でも売ったのであろうか。

いま、美しく拡幅舗装された新宿の町並をみるにつけ、今昔の思いに耐えない。

#### 伊奈市の出店一覧 (江戸後期と推定される)

伊奈村市庭提供者名	市庭借用業者			伊奈村市庭提供者名	市庭借用業者					
	住所	名	業種		住所	名	業種			
清左衛門	八王子かどや	忠兵衛	記載なし	権之丞	武州砂川村	岡右衛門	穀売			
	八王子橋町	伊兵衛	"		四郎兵衛	青梅下村	仁兵衛	小間物売		
	八王子八日市	源助	"			羽村	九郎右衛門	釜売		
	八王子八日市	権兵衛	"			横川村	甚右衛門	なべ売		
	八王子八日市	平八	"			拝島村	新兵衛	釜売		
	二ノ宮村	又兵衛	なべ売			九左衛門	河崎村	権左衛門	穀商人	
伊奈村新町	半兵衛	小間物売	羽村	勘右衛門	穀商人					
大久野村	次兵衛	なべ売	大久野村	善右衛門	穀商人					
左五兵衛	武州宮寺	三右衛門	穀商人	与兵衛	小机村	庄右衛門	かか			
	武州石畑村	伍右衛門	足袋売		平井村	安左衛門	かか			
	武州石畑村	五郎助	足袋売		留原村	三郎右衛門	石売	売		
	宮寺高根村	小平次	足袋売			野辺村	藤七	石売	売	
宮寺高根村	弥平次	足袋売	福生村	次兵衛		石売	売			
武州石畑村	とらの助	足袋売	福生村	長九郎		石売	売			
武兵衛・左五兵衛	上平井村	長(七?)左衛門	記載なし	福生村	権左衛門	穀商人	売			
庄右衛門	川口村	太兵衛	"	長左衛門後家	川口村	政右衛門	木綿商人			
	八王子	藤兵衛	"			川口村	庄左衛門	木綿商人		
	江戸	万右衛門	"			川口村	喜之助	木綿商人		
仁右衛門	横沢村	吉兵衛	"			伊奈村新宿	政右衛門	木綿商人		
甚五左衛門	羽村	佐右衛門	石売	七兵衛	砂川村	藤右衛門	石売			
		政右衛門	木綿商人			弥五左衛門	羽村	与左衛門	釜商人	
		三左衛門	穀売					羽村	長五郎	穀商人
		伊右衛門	穀売					平井村	三郎右衛門	釜商人
三郎左衛門	小川村	喜左衛門	穀売	平井村	三内村	与四右衛門	釜商人			
		六兵衛	穀売			平井村	佐右衛門	釜売		

## 資料紹介



### ガス燈

高サ 1050<sup>ミリ</sup>  
巾 700<sup>ミリ</sup>

アセチレンガス燈。  
五日市町上宿の老舗、和泉屋の蔵造り店舗の軒に掲げられていたもの。店は明治二十四年の建築で、この軒燈は明治の後半から大正にかけて使用された。和泉屋の土蔵と店は五日市の町なみに重みを与えたが、このガス燈は町を代表するアクセサリーであった。

ガス燈は紫色に光り、明治の情緒をかもした。この光の下に、紺のれんを分けて竹久夢二調の女性が出てくれば満点である。

五日市の町通りは大正五年末に電燈がともった。和泉屋ではガス燈の中へ電球を引込んで使用した。その頃の和泉屋は呉服の他に味噌醬油も売った。



### 薬看板

高サ 1480<sup>ミリ</sup>  
巾 610<sup>ミリ</sup>

五日市町東町井上商店寄贈、井上商店は五日市でも古い薬局で、明治大正期の看板類を沢山寄贈していただいたがその中の一つ。黒の漆塗りで古風な縁取りがある。字は金箔で彩色され、書体がすばらしい。当時著名な書き手の手になるものとか。

黒と金の組合せは一種独特の怪しさを感じさせるが、十六花瓣の菊の御紋章が權威を添えている。この薬を吞めば子供のかんのむしなどピタリと癒りそうである。

## 郷土館で本をつくりました



### 楽しい郷土史 五日市 いろはカルタ

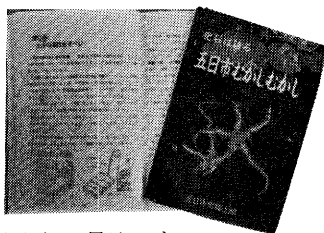
A 5 版 156 頁  
¥800

いろはカルタの形式をかりた郷土史です。五日市町の主な歴史事項を47項目に分けて書いてあります。1つずつ話を追って読んでいくうちに大変なもの知になります。神社やお寺もその成立の由来がわかり、戸倉や伊奈など各地区の歴史にも通じます。

内容は広範囲にわたっておりますが、それぞれに濃く、高度です。墨絵のさし絵にもトボけた味があり、写真と一緒に楽しめます。

### 化石は語る 五日市 むかしむかし

B 6 版 62 頁  
¥350



五日市地方は多様な地層が入り混り、化石の宝庫で、地学の野外研修場として知られています。この本は五日市盆地の地学研究を数年来継続している少壮研究者グループ（主に高校の先生方）の手になるものです。やさしい解説書ですが、内容は高級で、学問的にも最新の知識がもらわれています。値段も安く、地学の勉強

や化石採集のガイドブックとして最適です。